

【新技術情報-2】

水稻新奨励品種「にこまる」について

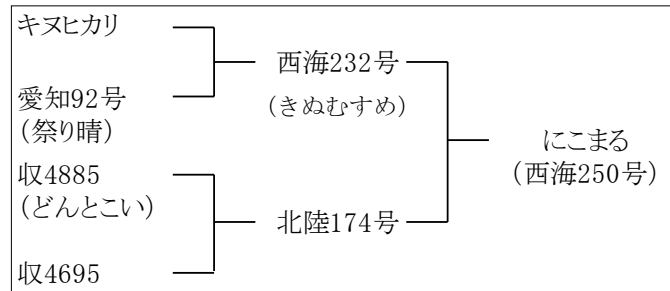
中生の主力品種である「ヒノヒカリ」は、食味の良い品種ですが、近年、夏季の高温による白未熟粒や充実不足粒の発生で、1等米比率が大幅に低下することが問題となっています。

そこで、夏季高温でも品質低下が小さく、さらに良食味で多収品種とされる「にこまる」が愛媛県の中生の新奨励品種として導入されました。

1. 「にこまる」の来歴

九州沖縄農業研究センターで、多収、良食味品種の育成を目標に育成され、平成20年3月に品種登録となりました。

本県では平成23年に産地品種銘柄の選択銘柄として指定され、平成25年2月に奨励品種として採用されました。



2. 特性の概要

生育・収量及び品質（県農林水産研究所 普通期栽培6/15田植）

品種名	出穂期 月/日	成熟期 月/日	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/m ²	倒伏 0-5
にこまる	8/27	10/9	80	19.7	303	0.1
ヒノヒカリ	8/25	10/6	81	19.9	327	0.2

品種名	収量 kg/10a	収量比 %	千粒重 g	良質粒 割合%	玄米 タンパク%	品質 1-9	検査 等級
にこまる	571	110	23.9	68.8	7.4	3.3	1.2
ヒノヒカリ	521	100	22.6	71.3	7.5	4.5	1.5

※H15～24年の奨励品種決定調査（予備・本調査）の成績の平均値。

玄米重、千粒重は1.8mm以上。品質は1（上上）～9（下下）の9段階評価。

- ① 出穂期は2～3日、成熟期は3～5日程度「ヒノヒカリ」より遅く中生の晩に属します。
なお、標高の高いところや低温年ではさらに遅くなります。
- ② 稈長は「ヒノヒカリ」と同程度、穂数はやや少なく、草型は偏穂重型に属します。
- ③ 収量性は「ヒノヒカリ」より明らかに多く、多収です。
- ④ 伏性はやや強で「ヒノヒカリ」と同等です。
- ⑤ 粒重は「ヒノヒカリ」よりやや重いです。
- ⑥ 米の外観品質は「ヒノヒカリ」より優れ、特に登熟期の高温あるいは寡照条件でも「ヒノヒカリ」に比べて白未熟粒の発生が少ないです。
- ⑦ 飯米は光沢と粘りに優れ、食味は「ヒノヒカリ」と同等の良食味です。
- ⑧ いもち病に対しては「ヒノヒカリ」と同等～やや弱いです。
- ⑨ 穂発芽に対しては「ヒノヒカリ」より弱いです。

3. 栽培上の留意点

- (1) 基本的には栽培管理は「ヒノヒカリ」に準じますが、生育ステージが「ヒノヒカリ」よりやや遅いので、穂肥等の管理のタイミングは数日（2～3日）遅めとなります。

(2) 「ヒノヒカリ」に比べ
発芽・苗の伸長も早く、
移植後の草丈の伸長も
大きい特性があります。
このため、苗を徒長さ
せないよう「ヒノヒカリ」
より早めに緑化と硬化に
移します。田植後の深水



苗の様子 (にこまるは徒長しやすい) 水尻部の深水で徒長した状況

は徒長する危険性が高いので、除草剤散布後、一定期間が過ぎたら浅水で管理します。

(3) 作付は標高 100m以下とし、極端な遅植えをす
ると出穂、成熟期が遅れ、十分な登熟期間が確保
できず、減収、品質低下を招く恐れがあります。
移植時期は6月上旬以降としますが、田植適期
は6月中旬とし、7月以降の遅植えは避けます。
早植えは、登熟前半が高温期に遭遇しやすいため
避けます。



穂揃期頃の様子 (上位葉が長く穂が見えにくい)

(4) いもち病にやや弱いので常発地での作付や極端
な多肥は避け、適正な防除に努めます。

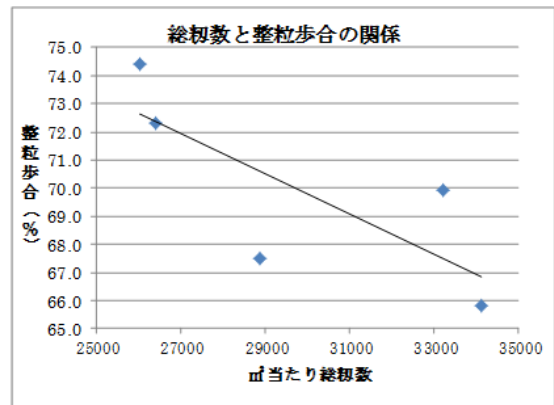
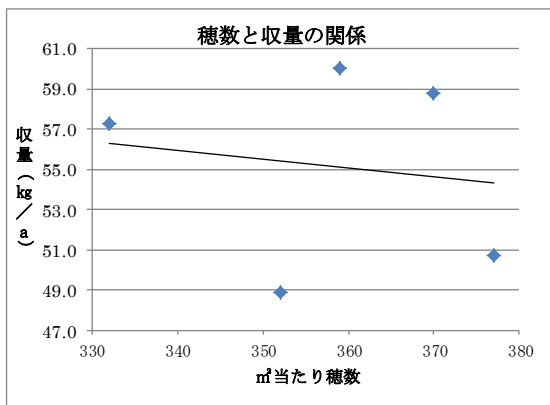
(5) 成熟期の葉の黄化が遅く緑色が保たれるので、収穫適期は籾の黄化で判断します。
収穫適期基準

	にこまる	ヒノヒカリ
出穂後日数 (日)	42～48	40～46
最長稈黄変籾率 (%)	85～90	85
積算温度 (°C)	1,000～1,150	900～1,100

<H25 「にこまる」栽培実証結果より>

下図のように、穂数が多くても多収とは限らない、面積当たりの籾数が多くなる（穂数が多くなる）と整粒歩合が低下するという関係がありました。

「にこまる」は偏穂重型品種であり、穂数よりも一穂籾数で収量をとるタイプです。過剰な穂数の増加より、1穂籾数、登熟歩合、千粒重を増加させることが収量・品質を高めるために大切です。そのため、過剰分けつさせないよう適正な基肥・栽植密度（坪50株程度）とし、穂肥重点の栽培管理とします。



【技術情報－3】

白ねぎの新規作型実証

久万高原町の白ねぎは平成 19 年度から春まき秋冬獲りの作型で導入されました。

しかし、白ねぎには周年を通じた需要があるうえ、夏～秋の方が出荷量が少なく高単価になります。また、慣行の秋冬獲りと組み合わせることで作期（出荷期間）の拡大につながることから、夏秋獲りの作型を産地育成室久万高原駐在所の圃場で実証しましたので報告します。

1. 実証内容

- (1) 供試品種：夏扇パワー（サカタのタネ）
- (2) 播種：1月7日（チェーンポットCP303 264穴 2粒播き）
- (3) 定植：3月6日
- (4) 施肥：（10aあたり）

基肥：バーク堆肥 2,000kg、苦土石灰 80kg、美土里 40kg、PK30 40kg、農協専用500 60kg
 追肥：農協専用500 240kg（7回に分け、土寄せ時に併せて行う。）

作型	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
秋冬獲り			○	—	×	1 ○	2 ○		3 ○	4 ○	5 ○	6 ○	7 ○	
夏秋獲り	○	—	×	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	6 ○	7 ○				

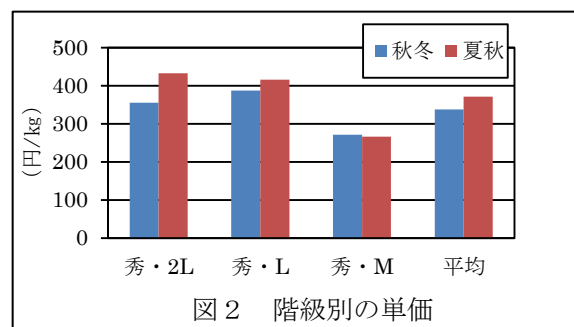
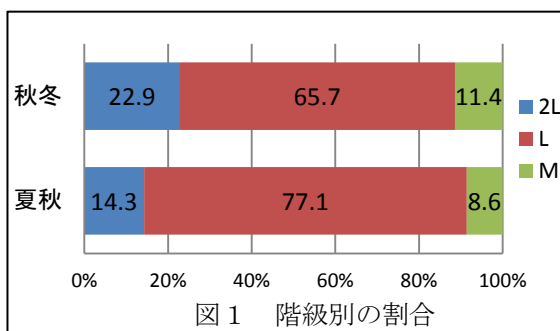
○：播種期
 ×：定植期
 V：うね割
 ○：土寄せ
 ■：収穫期

2. 実証結果

収穫は8月末から9月上旬にかけて行いました。例年、秋冬獲りの方が2L・Lの割合が高いのですが、今年度は夏季の異常な高温と、秋口の連続した台風の豪雨によって、生育が不良となりました。よって両作型の生育はほとんど同程度となりました（表2、図1）。また、販売単価は夏秋獲りの方が平均で34円/kg高くなりました（図2）。

表2 秋冬獲り作型との比較

作型	草丈 (cm)	葉鞘長 (cm)	調製葉鞘径 (mm)	平均調製重 (g/本)	可販率 (%)	L以上 (%)
秋冬獲り	98.4	38.2	17.9	148.2	97.2	88.6
夏秋獲り	97.3	39.9	17.5	146.9	97.2	91.4



3. 考察

今年度は8月末から収穫しましたが、24年度は9月下旬、23年度は9月中旬に収穫できたことから、各年の気象等の条件による生育差を考慮しても、概ね9月頃から収穫できることが確認できました。2Lは20本/箱、Lは30本/箱と、箱詰めに必要な本数が10本も違うことから、収益を上げるために、今後は夏秋獲りでも2Lの割合を増やすことが必要です。

(久万高原町駐在技術普及グループ TEL0892-21-0314)

【新技術情報-4】

愛媛県オリジナルのデルフィニウム「さくらひめ」の栽培

～中予地域における取組み～

愛媛県はエラータム系デルフィニウムの主要産地ですが、愛媛の花としてブランド化を図るため、シネンシス系の品種「さくらひめ」が農林水産研究所で育成・品種登録されました。

品種の特性としては①ピンク色の発色が非常に鮮やかであること②生育が良好で草丈が高く、切り花長が長く生産性が高いこと③一枝あたりの花数が多く花にボリューム感があり商品性が高く用途が広いことがあげられます。

1. 現地試験の実施

平成 23・24 年度に、愛媛県内 17 戸の農家で栽培特性試験を実施しました。

主な作付体系は促成栽培で、出荷期は 12 月下旬～1 月上旬、3 月下旬～4 月上旬、6 月下旬となります。

中予地方局管内では、25 年度に 4 戸の試作希望農家に苗を配布しました。県下では 17 地区(10 a)に配布され栽培が始まりました。定植時期の高温により初期の生育が遅れたものの、その後は順調に生育しました。12 月 20 日より周桑や大洲地区で出荷が始まり、東京・大阪での市場価格は 150 円/本で、その後も安定しているようです。

2. 栽培農家を取材 ―栽培した感想は?―

東温市牛淵で今年初めて「さくらひめ」を栽培した露口真人氏宅を取材しました。

露口さんは、25 年 10 月に、150 m²のハウスの一部(約 50 m²)に「さくらひめ」の苗を定植しました。

そのハウスでは、同じシネンシス系の「スーパーグラブル(青色)」が植えられていますが、それに比べて「さくらひめ」のピンク色は冬の寒い時期に何となく心が休まるとおっしゃっていました。

初めての栽培で、収穫時期の開花の調整に少し戸惑ったそうですが、今後は栽培面積を拡大していくそうです。

また、定植時期をずらして、年末年始に対応した 12 月からの出荷と、2 月 14 日のフラワーバレンタインデーをねらった出荷ができればと販売戦略も立て、栽培意欲を膨らませています。

地元直売所にも「さくらひめ」を出荷しているのでは是非一目見てほしい、とのことでした。



県の育成品種「さくらひめ」



収穫作業をする露口氏

(産地育成室 TEL089-909-8763)